



指導編

- (1) 家庭における指導
- (2) 幼稚園における指導
- (3) 小学校における指導

言葉は漢字で学習しなければならない

「防砂林」「拡声器」……

こんな言葉は、漢字で表記して提出し、学習させるならば、教師が、取りたてて説明してやらなくても、子供たちが、独力で言葉の意味を理解してしまいます。

ところが、現在の学校教育では、「漢字表記では子供たちにむずかしい。」とさえ、これを、「ぼうさりん」「かくせいき」というかな表記で提出し、学習させているものですから、教師が一生懸命に説明してやっても、子供たちにはなかなか言葉の意味が理解できません。

「校舎」「講堂」

これらの言葉は、同じ「こう」という発音をもっていますが、前者は「学校」の意味の「校」であり、後者は「講演」の意味の「講」であって、そこにはそのように明瞭な意味

の違いがあるのですが「こうしゃ」「こうどつ」という表記で学習する今の子供たちには、両者の違いを理解させることができません。



このように、現在のわが国の国語教育では、言葉の学習を漢字の学習と切り離し、言葉は言葉として、漢字は漢字として学習させていますから、言葉の学習では、言葉のもつ深い味わい、ニュアンスというものはとても理解することができません。

漢字の学習も、漢字だけの学習では、漢字を言葉として使用する能力を養うことができません。

石井方式では、漢字を学習させるのではなくて、漢字で学習させるのだ、と言っています。これは「漢字で言葉を学習させる」という意味であって、言葉は言葉だけ、漢字は漢字だけの学習を否定し、言葉を漢字とともに学習させることを説いたものです。

「社会で一般に漢字を用いて表記している言葉は、常に漢字で表記して提出しなければならぬ」という「石井方式の基本原則」を主張する理由は、すでに前章でくわしく述べましたが、そのほかに、このような理由があるのです。さて、具体的な学習法は、(1)家庭、(2)幼稚園、(3)小学校、と三つに分けて述べたいと思います。

(1) 家庭における指導

言葉の教育は零歳から始まる

言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも、成功の原因である、……こう言って、『言葉の力』を、四十万人もの人々の実験を通じて実証した人がいます。それは、アメリカの科学者、ジョンソン・オコナー博士です。

博士は、中学生・高校生・大学生・工場勤務者から、大会社幹部、監督級まで、杓四十万人の人々にテストを行なって、学校で成績の良い学生・生徒、社会で地位が高く収入の多い人は、例外なく「言葉が豊富で正確であった。」と報告しております。

人は言葉で物事を考えますから、言葉が豊富で正確であることが、思考の幅を広げ、これを精密にし深めることは当然です。教育の基礎は、言葉を豊富に与え、その内容を正確に理解させることにあります。

言葉の教育は、零歳から始まっています。赤ちゃんは、生まれ落ちてから、人の声を耳にし、それを一つ一つ大脳に刻みつけているのです。それがやがて、赤ちゃんの発する声の基礎になるわけです。

世界的なヴァイオリニストを何人も育てられた鈴木鎮一先生が、次のようなことをおっしゃっています。

「生まれたばかりの赤ちゃんに、毎日、美しい音楽、たとえばバッハだとかモーツァルトだとか、だれでもいいわけですが、とにかく名曲のすぐれた演奏のレコードを毎日、何度か聞かせるのです。これは必ず同じ曲のレコードでなければなりません。

そつしますと、その赤ちゃんは、生後五か月くらいで、メロディーを知るだけでなく、

リズムも音程も、また音楽のセンスも、自分のものとして身につけていきます。

これをためすのは簡単です。毎日聞かせている曲の前に、もう一つ別な曲をつないだテープを作って、いっしょに聞かせるのです。

そうしますと、初めて聞く曲のほうは、じっと耳を傾けていますが、次に、いつも聞いている曲になりますと、とたんに目を輝かして、お母さんの顔を見てニコツと笑います。知っているよ、という表情なのです。そして体を振ってリズムに合わせて喜びを示します。これは、もうすでにその音楽が身についている証拠です。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように、そこに表現されるものは、何でもそのまま記録していく機能をもっていて、繰り返し見聞きするものほど、鮮明になっていくのだと思います。」

従来、音楽の才能は生まれつきで、天分のない者はいかに教育してもだめだ、と言われていました。これを、証拠をもってくつがえしたのが鈴木先生です。音痴は、音痴になるように育てられたから音痴になったのであり、ベートーベンは、赤ちゃんの時から、美しい音楽を聞いて育ったから、音楽の才能が育ったのだ、というのです。

だから、鈴木先生は、赤ちゃんの時から、できるだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせなければならぬ、とおっしゃっています。幼児にはバッハは無理だろうとか、ベートーベンはむずかしいだろうと考えるのはおとなの考えで、幼児は、与えられたものは何であれ吸収し、そしてたくわえていくのです、ともおっしゃっています。

そうしてみると、生まれたばかりの赤ちゃんのそばでは、夫婦げんかをする 것도 慎まなければならぬ、ということがわかります。「赤ちゃんの前だから大丈夫だ。」ではなく

て、「赤ちゃんの前だから大変だ。」というように、考え直さなければなりません。



子供に美しい言葉を身につけさせるには親自身美しい言葉を使う

れを耳にしているからです。子供に美しい言葉を身につけさせたいと思ったら、赤ちゃんの時から、きたない声を遠ざけ、美しい声を繰り返して聞かせるように、努力しなければなりません。結局、自分の子をりっぱに育てるためには、まず、親自身がりっぱなお手本を示さなければなりません。それには、親自身がりっぱなお手本になるべく努力しなければなりません。

早口でしゃべる親の子供はやはり早口、乱暴な

大声でしゃべる親の子供はやはり乱暴な大声、子供の良い悪いはすべて親の責任で、子供に責任はありません。

まだ言葉を聞きとる能力がないと思われる赤ちゃんに、よく話を語りかけるお母さんがあります。何をする時でも、わかるまいと思われるのに、やさしい声で語りかける、むだのように見えますが、実はこれが大事な教育なのです。

おむつを換えるのに黙っていないで、「花子ちゃん、いい子ね。」を繰り返したり、「きれい、きれいしましょうね。」と話しかける、それが子供を育てる「言葉」の教育です。

アメリカの保育所で、一歳二、三か月の幼児に、毎日十五分くらい、話を聞かせてやるグループとそうでないグループとを作り、それを半年くらい続けた後にテストしてみると、毎日定期的な話を聞かせたグループの幼児たちのほうが、知能が著しく伸びていた、と

いう報告があります。美しい声の発声練習のつもりで、できる限り美しく、やさしく、愛情をこめて子供に語りかけるようにしましょう。その親の努力の大小が、子供の運命を決めるのです。

思考能力はまねをし反復し質問して育つ

まね(まね)という言葉は、昔はまね(まね)と言いました。つまりまね(真似)をする。という意味の言葉でしょう。幼児は、見るもの、聞くもの、すべて模倣し、模倣することによって経験を記憶し、能力を高めていきます。

言葉の能力が著しく伸びるのは、二歳から三歳ごろで、この時期は、人の言葉をすぐまねて、それをすぐ自分の言葉としてしまいます。まさに、まね(まね) || 学習(まね)です。

だから、教育学者は、この時期を模倣期などと呼んでいます。鉄の真赤に熱している時期に当たります。この時期に、言語環境が良かったか悪かったかで、その能力に大変な違いがでますから、注意が肝要です。

テレビやラジオのコマーシャルをよく覚えてまねをするのも、この時期です。テレビやラジオの管理にも注意しなければなりません。親が下品な番組にスイッチを入れて楽しんでいるようでは大変です。

学習(まね)のまね(まね)がまね(まね)なら習(まね)なら(まね)はなれる(まね)です。慣れる(まね)の古い形は慣(まね)で、なら(まね)はその変化したものです。物事を繰り返し繰り返しやって慣れるのが、なら(まね)ことです。

つまり学習(まね)は、まず手本をまね(まね)て、そのまねたことを反復して慣(まね)れる(まね)こと

です。『まねる』ことと、それを『繰り返す』こととで、子供の能力が育つのです。

この時期の幼児は、だから『反復』が好きです。お話でも、同じ話を何回でも繰り返して聞くの喜びます。同じ話をせがまれる親はつらいでしょうが、同じ話を聞くことによって、子供は言語能力を伸ばしているのですから、いやな顔をせずに愛情をこめて、繰り返してお話をしてやらなければなりません。

幼児が、物語をすっかり覚えて、親がちよっとでも違って話そつものなら、すぐ『違う。』と言って訂正するくらいになるまで、繰り返してやるのが、親のつとめです。

この時期の幼児は、吸収力が強いだけに、知識を求める精神も旺盛です。だから、見るものにつけ、聞くものにつけて、「これなあに。」「あの人だあれ。」「ここどこ。」「と、質問を連発します。

この質問の答えによって、その子供の知識ができていくからです。幼児の質問は大事にし、子供が質問しやすいような雰囲気を作る努力をするとともに、質問には注意深く、親切に答えてやらなければなりません。

「なあに。」「だれ。」「どこ。」「という単純な質問から、次に「どうして。」「なぜ。」「という、物事の原因や理由を追求する質問を発するようになります。これは、それまで単純に別々のものと見ていた物事に対して、これに関係づけ、結びつけて考えるようになったためです。

幼児の思考能力は、こうなって著しく向上しますから、忙しい時などうるさいでしょうが、真剣に、喜んで答えてやる必要があります。

ある時、ある所で、次のような事件が起きました。空が夕焼けで赤かった時、狂犬が射殺されたのです。その時から、それを見た二歳半の男の子は、赤い夕焼け空を見るたび



に、自信たっぷりと言ったそうです。また、あそこで犬が殺された。」と。

二つの現象の間に、因果関係を見つけようとする、子供のこの想像力・推理力は尊重しなければなりません。子供の推理には、経験がとぼしいだけに、稚拙なものが多いでしょう。しかし、それはそれなりに尊く、絶対に軽蔑してはなりません。犬が殺された。赤い血が流れた。空が赤かった。この三つの事柄を、「殺されたので血が流れた。」

「血が流れたので空が赤く染まった。」と結びつけたのです。

だから逆に、「空が赤い。」という事実があったからには、「犬が殺されたに違いない。」

と推理したのです。

この時期には、「……ので……」「……から……」「……」というように、重文が使えるようになります。

子供には正しい発音を

発音としては、幼児には、「サシスセン」「ラリルレロ」などが発音しにくいものです。サはタに、ラはダに発音されます。

だから、「お父さん」は「お父たん」「ラッパ」は「ダッパ」になってしまいます。これは直そうとしても、すぐに直せるものではありませんから、しばらくそのままにしておきます。

ただし、子供の誤った発音を、親がまねて言うことはやめましょう。子供は「ダッパ」しかし、親は「ラツパ」と正しく発音します。そこで、子供は、自分の発音と親の発音の違いが、耳の発達に伴って、自然とわかるようになり、子供が自分で改めるようになりま

す。

幼児語はなるべく使わないようにし、使っても、なるべく早い時期に、これを切り換えるようにしたほうがよいと思います。前にも述べましたが、習慣を改めるには、前の習慣の二倍の期間努力しなければならない、と言われていて、遅くなればなるほど、子供が苦しむからです。

実体に即した漢字はやさしい

幼児は、実体に即して考えます。実体のない言葉は理解できません。ところで、多くの人は、よく、鳩を見ても雀を見ても、これを「鳥」と教えます。しかし、鳩は鳩、雀は雀と教えるべきです。鳩や雀がわかってから、それを統合する言葉として「鳥」を教えるのです。

「お母さん」という言葉にしても、初めは自分の母親だけを表す言葉としてしか、理解できないものです。そういう認識の段階にある時には、「友子さんのお母さん」という言葉が、理解できなくて、「それはお母さんじゃあない。お母さんはここ。」と言って、自分の母親を指します。

幼児は、このように、実体に即して言葉を理解しますから、実体のない、抽象的な言葉

を早く与えるべきではありません。鳩も「鳥」、雀も「鳥」、鶴も「鳥」と教えたのでは、幼児には理解できません。まず、実体に即して、「鳩」「雀」「鶴」を教え、それらに共通している点、翼がある、羽毛が生えている、足が二本、そういう認識を通して初めて、「鳥」という言葉を教えるのです。

そうすれば、「カナリヤ」を見ても、その名前はわからないが、「鳥」の仲間である、という理解ができるようになります。

漢字も、実体に即した漢字は、三歳児なら十分に理解できます、二歳児でも三十パーセントは理解します。一般には、三歳くらいから始めるのが適当です。

漢字も、言葉と同じように、実体に即して教えるのですが、漢字の場合は、漢字、言葉、実体と、この三者を結びつけていっしょに教えます。

つまり、「鳩」という字が「はと」と発音できただけでは不十分で、鳩そのものが頭に描き出されなければなりません。言葉が、実在を思い起こさせる「聴覚的信号」であるのに対して、漢字は、実在を思い起こさせる「視覚的信号」です。

実体に即した漢字は、どんなにむずかしく見えても、幼児にとってはむずかしくありません。それはおとなの考え方で、誤った先入観です。漢字を幼児に与える場合には、この先入観をぜひ捨て去る必要があります。

牛乳瓶には「牛乳」の字がありますので、これなどは、正に実体に即してすぐ覚えらる漢字です。牛乳の実体と「ぎゅうにゅう」という言葉はすでに結びついているでしょう。それに「牛乳」という漢字を結びつけるのです。

この場合、「牛乳の牛は『うし』とも読めて、乳は『ちち』とも読めるのよ。」とすぐ教

えたがるのですが、これはいけません。その教え方では、実体に即していませんね。「牛」という漢字は、実在なる牛に即して別の機会に教えなければなりません。

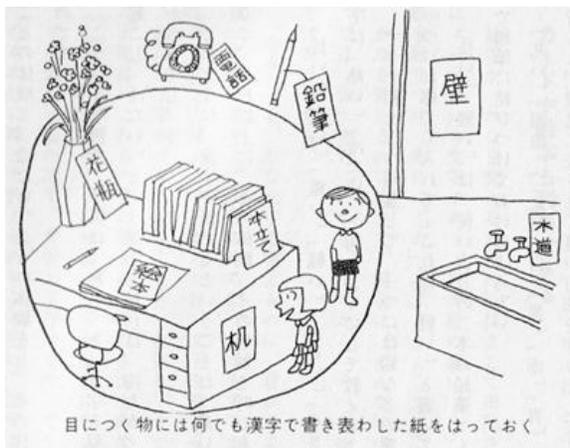
実際に即して「牛」を教えた場合でも、「この字は、前に教えてあげた『牛乳』の『牛』ですよ。」などと言ってしまっただけではいけません。それは、「これは栄養がある食べ物だからね。」と言って、子供の口へ食べ物を押し込むようなものです。

子供の気が付くまで待って、「お母さん、牛という字は、牛乳の牛と同じ字じゃあないの。」と言った時に、「えらいわねえ、気が付いて。牛乳って、牛の乳なのよ。だから、牛の乳と書いて『ぎゅうにゅう』って読むのよ。」と教えてやります。

体験を通じて覚えさせるよう工夫する

牛乳瓶で「牛乳」を覚えさせるように、文字どおり、実体に即して漢字を教える方法があります、机に「机」、本立てに「本立て」、壁に「壁」、花瓶に「花瓶」というように、漢字を書いた紙きれを貼っておくのです。

こうして、「洗面所」「台所」「水道」「洗面器」「奢」「茶碗」「絵本」「鉛筆」「三輪車」「電話」「鏡」「鏡台」……など、漢字で書き表わせるものは、何でも利用することができます。



この応用で、「熱い」「冷たい」という漢字を教えることができます。二本の牛乳瓶に、一つは「熱い」他は「冷たい」という漢字を書いた紙を貼りつけ、それぞれに、熱湯と氷水を入れておくのです。

子供は、この二つの瓶に触れることにより、[〃]熱い[〃]ことの体験と、[〃]冷たい[〃]ことの体験をし、その体験を「熱い」「冷たい」という文字に結びつけさせるのです。

こういう学習で、子供は、「熱い」という字を見れば、熱かった経験を思い浮かべ、その感触を思い起こし、「冷たい」という漢字を見れば、冷たかった経験を思い起こし、その感触をまぎまぎと思い浮かべるでしょう。

このように、漢字が読めるということは、「熱い」という漢字を「あつい」と発音できることではなくて、それ以上に、その体験、その感触を呼び起こすことでなければなりません。

「長い」「短い」「重い」「軽い」「大きい」「小さい」「太い」「細い」「広い」「狭い」…
…こういう漢字は、「熱い」「冷たい」と同じようにして教えることができます。

マッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重い物を入れて、これに「重い」と書いておき、もう一つには綿でも入れて、これに「軽い」と書いておけばよろしい。

「長い」「短い」は、使い古しの二本の鉛筆でもよろしい。この場合は、カードに漢字を書いて、糸で鉛筆に結びつけておけばよろしい。

「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」「赤」「青」など、こうして教えられるものはいろいろあります。皆さん、創意工夫されて良い方法を作り出してください。

カードや絵本も利用できる

幼児が、かなを覚えるための玩具として市販されているものに、「文字板」があります。犬の絵の裏に「い」という文字があり、馬の絵の裏に「う」という字のあるものです。この「かな」の部分に、紙を貼りつけ、それに、「犬」「馬」……などの漢字を書き入れるのです。

かなを覚えるのに比べて、漢字は、どんなにやさしく、楽しく覚えられることでしょうか。幼児にとっては、「犬」から「い」を、「馬」から「う」を抽出することは、おとなが考えているほど簡単なことはありません。

「がるた」も、かな文字を覚えるのに、昔からよく使われています。正月の遊びに、いろはがるたを買ってやりますと、正月のうちに、かなをすっかり覚えてしまうことは、一つの有力な方法です。

私は、「漢字カード」「漢字かるた」を作り、すでに多くのご家庭で使っていたいただいておられます。本書の末尾に、これらの発行所を書いておきますので、ご利用ください。

しかし、漢字カードにせよ、漢字かるたにせよ、お母さんの手作りは、粗末なものでも、子供にとっては楽しいものです。骨折って作ってやってください。

絵本の絵に即して教えるのもよろしい。幼児のための「漢字の絵本」を、学研・幼文社などから出していますが、一般の絵本でも、十分に利用できます。

ただ、今の絵本は、かなが使われていますので、これは見えないように、紙をかなの上貼り付けてください。そして、そのかなに関係なく、絵に相当する漢字を書き入れるのです。

たとえば、犬の絵のそばに「犬」と書き入れ、電車の絵のそばに「電車」と書き入れるのです。

絵本の内容は、動物や植物、おもちゃ、家庭の生活を扱ったものが適当でしょう。もちろん、童話、物語など、幼児の関心と呼ぶものだったら、何でもよろしい。

書き入れる漢字も、子供の知っている言葉、とりわけよく使っている言葉を表わした漢字がよろしい。

初めから、たくさん書き入れないように。初めは一ページに、一字か二字くらい。それも、目立つように、二〜三センチメートル四方くらいの白紙に漢字を書き入れ、それを貼り付けたほうがよろしい。子供に「おやっ」と思わせる工夫が大切です。

与えすぎは絶対禁物である

親は、「漢字を教えてやろう。」という気持ちで、できる限りおさえてください。親というものは、良い上にも良いかかと思いい、適度ということを考えないで、子供に無理強いをして失敗します。

食べ物と同じで、「あれも食べさせたい、これも食べさせたい。」で、過食させ、かえって病気にすることがよくあります。腹八分めと言い、控えめにすることが大切です。

絵本に貼り付けたら、あとはほっておいたほうがよろしい。幼児は好奇心が強いので、貼られた漢字を見れば、き



つと「お母さん、これなあに。」と尋ねるはずでず。子供の質問に答えて教える。これが最も効果のある教え方です。たびたび申し上げていますように、記憶の原理は「関心」です。幼児が関心を示して質問し、それに答えてやった場合は、そうでなくて教えた場合の、十倍も二十倍もの効果があります。

漢字の次には短文を与える

「口」「目」「耳」「鼻」「顔」「頭」……

このような「実体に即した漢字」を覚えるのが第一段階で、第二段階は、

「大きい口」「赤い目」「長い耳」

「高い鼻」「丸い顔」「頭の毛」

など、「漢字と漢字をつなぎ合わせたもの」に進みます。

第三段階は、

「兎の耳は長い」「兎の目は赤い」

「水で顔を洗います」

というような「短文」に進みます。

漢字まじり文は、かなばかりの文と違って、文をまとめて、すらすらと読みますので、文意を正しくつかみ取ります。それができているか、できていないかをテストする方法としては、「兎の目は長い」「犬の耳は、兎の耳より長い」というような文を読ませて、その内容の変な点に気付くかどうかをみます。

次には、子供のよく歌う歌の歌詞を、正しい表記にして与えるのが良い方法です。

青い鳥 小鳥。

なぜなぜに青い。

青い実を食べた。

とか、

海は広いな、大きいな。

月が上るし、日が沈む。

というような、あまり長くなく、内容もわかりやすいものから始めてください。

とりわけ、前者の場合には、「鳥」「青」が繰り返し使われていますので、幼児の目に触れやすく、したがって学習効果が高まりますので、歌詞を選ぶ場合には、なるべくそういうものを選んでください。

また、子供が好んで、繰り返し読んでもらいたがる物語、また、自分でよく見る絵物語があつたら、それを教材にするのもよろしい。

たとえば、それが、

「あるひ、もりのなかで、はとがあつまつて、まめをたべていました。」

という文だとしますと、「ひ」「もり」などの上に紙を貼って、その上に「日」「森」という漢字を書き入れて、

「ある日、森の中で、鳩が集まって、豆を食べていました。」

というように、漢字まじり文に改めます。毎日、本を見ている間に、ひとりごに漢字を覚えていきます。

書く指導は急いではいけない

漢字が読めて、それが何を意味しているかがわかるようになる、おとなのように、それを書いてみたいという気持ちが出てくることもありましょう。

石井方式では、「書く」ことはなるべく遅く教えることにしています。子供がすすんで書きたがるまでは書かせないことにしています。しかし、子供が、どうしても書きたがるようでしたら、書くのに任せて、黙って見守りましょう。

筆順はでたらめ、形もめちゃくちゃでしょうが、黙って見守っているのです。幼児の描く絵をご覧ください。体よりも大きな頭、ひどいのは、頭から手が出、足が出ています。手の指だって、三本、六本、その時の都合でどうにでもなります。

そういう絵を書く子供に対して、字だけうまく書けと要求したところで、それは無理と
いうものです。時期がくれば、だれが教えなくてもだんだん整った絵を書くように、お化けのような字も、だんだん整った形になっていきます。

今の、文部省の指導方針では、漢字は「読む」ことと「書く」ことを同時に教え、同時にそれができようになることを求めています。

石井方式では「読み先習」、書く学習はあとまわしにします。これは、国語審議会でも、石井方式を支持する委員と反対派の委員とで白熱的な論争があったと報道され、昭和四十四年四月二十二日の朝日新聞では、「漢字教育、どちらが有効か」という見出しで「論争」を掲げました。このことについては、別に述べたいと思います。

教わったばかりで、字形について認識が足りない時に漢字を書かせますと、一点一画ごとに、手本の漢字を見比べなければ書けません。



書く指導は字形が思い浮かべられるようになってから行なう

くのかを教えるのです。

こんな学習を、何回繰り返したところで、書く力はできあがらない、というのが私の考えです。漢字が読めて、意味もよくわかり、使い方もよくわかり、しかもたびたびそれを読む機会を重ねることにより、目をつむっても、その漢字の字形が頭にはっきりと思い浮かべられるようになってから、漢字を「書く」指導を始める。……これが石井方式です。

つまり、頭の中に書けるようになってから、それを紙に書くには、どこから、どういう順序で書

頭の中に書ける漢字ですから、一点一画、手本と見比べることもありません。一ペンで正しく、美しく書けるようになります。

読み書き同時教育に比べて、なんと能率の良いことでしょう。同時教育では、なかなか書けるようにならないものですから、学校ではよく、「この字を十ぺん書きなさい。」とか、「ノートに一ページ練習してきなさい。」とか、漢字書き取り練習をよく宿題に出していますが、こんな学習をいくら繰り返しても、ほんとうの「書く力」はつきません。

赤ちゃんは、はいはいしている間に、手足の力を養い、やがて立って歩けるようになります。はいはいできないうちから、歩かせたところで、歩けるようにはなりません。それどころか、足が曲がってしまって、足の力が育ちにくくなります。

漢字も、読む学習を重ねている間に、字形の認識が深まり、それがやがて書く力になるのです。これを同時にさせている従来の学習法は、「はいはい」と「あんよ」を同時にやら

せる誤った教育法です。

読みたがらない本を読ませるには

お母さん方の訴えられる悩みの一つに、「うちの子供は、漫画やテレビばかり楽しんでいて、親が読ませたいと思って買ってきた本には目もくれないのですよ。どうしたら、ためになる本を読むようになるでしょう。」ということがあります。

これは、今の教育では、当たり前です。漢字が読めないのでは、漢字を多く使って書かれた「ためになる本」は、歯がたちません。そうかといって、「かなばかりのためになる本」は、これまた読みにくくて、子供に敬遠されます。

「かなばかりの本というものはおとなでも読みにくいものです。新聞が「かなばかりになったら、今までの二倍三倍の時間をかけても、内容がつかめないでしょう。子供ではなおのこと大変なはずです。」

事実、石井方式で育った子供たちは、「かなばかりの本は読みにくくて、読む気がしない。」と、はっきり言っています。そして、漢字を多く使った「ためになる本」を、むさぼるように読んで、かなばかりの漫画本など、見向きもしません。

私たちは、感動をもって読んだ文学作品が映画化された時、期待をもってこれを見ますが、いつもその期待は裏切られます。

私たちが、読書によって心に描いた世界は、この世の中で最も美しい世界だと思っています。読んで心に描き、心に描いてはまた読み続ける、こうして展開された物語に比べたら、どんな巨匠による、どんな名優による演技も、とても及ぶものではありません。

その意味では、『読書の楽しみ』は、この世の最高の楽しみだと思えます。しかも、私たちは、この『読書』によって、人間的に精神的に成長が遂げられるのです。

私たちは、子供たちに、まず何よりも『読書』する能力をつけてやらなければなりません。『読書力』それは結局『漢字力』漢字を理解する能力ということになります。

『だめになる本』を読まないのは、それを読む力がないからです。本そのものに興味があってもないも、読めないことには話になりません。それは、歯のない人に「するめはおいしいよ。」と言ってすすめるようなものです。

『だめになる本』を与える前に、まず、それが『読める』力を与えてやらなくてはなりません。『読める』力さえついたら、読むなど言ったって、子供は本を読まずにはおきません。

(2) 幼稚園における指導

なぜ幼稚園で漢字を教えるのか

漢字は、かなよりも親しみやすく、覚えやすい。

漢字は、どんな幼児でも三歳から覚えられる。

しかし、それだけでは、『幼稚園でどうしても漢字を教えなければいけない』理由にはなりません。

昔、ある人が、「子猫持つ身の悩みは、それがやっぱり猫になることだ。」と言って嘆いたということです。



人間の子は育て方によってどうにでもなる

チンパンジーをいくら教育しても、人語を操るようにはなりません。つまり、人間以外の動物は、いくら教育しても、反対にほっておいても、やっぱりなるようにしかならない、ということです。

ところが、人間は、狼に育てられると「狼」になるのです。顔かたちは人間でも、その心と行動とは、全く狼になってしまふのです。前編で紹介しました、狼少女カマラの一生が、そのことをよく物語っています。

人間以外の動物は、生まれるとすぐ「ひとり立ち」します。鶏など、生まれ出るや、一人前の顔をして走り回り、餌をついばんだりします。

それに比べると、人間の赤ちゃんはひどく無能力です。母親の乳房を吸うこと以外、何の能力もない、と言っても言いすぎではないでしょう。

だから、人間は母親の胎内にいる期間こそ長いが、生まれ出るのは、他の動物に比べて「数年も早すぎる」と言う学者があるほどです。なるほど、鶏を見たら、ひよこなど、人間では十歳以上の子供に当たりましょう。

しかし、人間は、「早く」生まれすぎたために、万物の霊長になりえたのだ、とその学者は言います。つまり、無能力の状態で生まれたために、「育て方」によって、狼になる可能性もあれば、霊長になる可能性もあるのだ、ということです。

昔から「三つ子の魂、百まで」と言われており、現代の脳生理学は、それを裏書きするのように、「人間的な思考をつかさどっている大脳は、生後三年間に、最も目ざましい成

長を遂げる。三歳児の脳は、成人の脳の六十パーセントにまで成熟している。」と述べています。

もし、この三年間が母親の胎内で過ごされたなら、人間の子供は、能力的に、ほとんど個人差をもたなかっただろうと考えられます。そうではなくて、人類は、この三年間を与えられたために、大きな「可能性」をもつに至った、というわけです。

このことは、同時に、人類は大変な責任を神から与えられた、ことを意味します。より良くすることもできる代わりに、悪くすることもできるのですから。

人類は、胎内で育てるべき三年間を、神に許されて、自らの手で、自らの好むように教育する責任をもったのです。子供が、他の動物のように、ひとり立ちできるまで母親の胎内で育てられたら、今ほどには人類は「教育の責任」がなかったに違いありません。

ともかく、人間の赤ちゃんは、その育て方によって、最もすばらしい動物にもなれる代わりに、動物以下の醜い存在にもなれるのです。私たちは、神から許された「子供を教育する責任」の重大性を認識して、その責任を果たすことに努めなければなりません。

人間の最も成長の著しいのは、生後の三年間でしよう。でも、この三年間は、それぞれの母親の責任で、母親以外の人は、これをどうすることもできません。

その三年間に次ぐ重要な時期は、小学校に入学するまでの「幼稚園期」です。私は、母親の養育を除いたら、人間の一生において、真に「教育」の名に価する教育のできるころは、ただ「幼稚園」だけだ、と思っています。

言葉と文字の教育によって知能を高める

人間は、言葉をもつことによって、人間になりえた、ということは真実でしょう。しかし、人間は、音声言語から、視覚言語、つまり文字をもつことによって、急速に文化を発展させることができました。

すぐに消えてしまい、近くにしか伝わらない「音声言語」を、いつまでも保存でき、世界のどこにでも伝えられる「視覚言語」のおかげで、私たちは、いかなる国の、いつの時代の偉人の思想をも受け入れることができるようになりました。

この「言葉」と「文字」の働きとその価値とを、私たちは正當に評価しなくてはなりません。私たちは、あまりにもその恩恵になれてしまって（たとえば「空気」のように）、その価値を忘れてしまっているように思われます。

私たちは、空気や水の価値を、金やダイヤモンド以下と考え誤ってはなりません。

「小学校に就学してしまった六歳以降の子供たちの知能は、ほとんど固定してしまって、動かすことができない。就学以前なら、子供の知能を引き上げることができる。言葉と文字の教育によって。」

これは、「リーダーズ・ダイジェスト」昭和四十四年二月号の特別記事として、世間の反響を呼んだものです。もともと、ここでは、文字という代わりに、

「読書への準備」という表現を使っていました。就学前の幼児としては「読書」そのものは無理であり、

石井方式 漢字の教え方



就学前の文字教育は読書への準備

その準備としての『文字教育』は、その目的が、文字そのものではなくて、読書にあるのですから、ここでは、『文字教育』よりも『読書への準備』のほうが適切な表現だと思います。

確かに文字の価値は、個々の文字そのものにあるのではなくて、それが『偉人の思想』を表現し、それを人に伝える点にあります。とはいえ、文字と思想との関係は、肉体と精神との関係に似ていて、私たちは、思想を尊重するがゆえに、文字の価値をも認めなければなりません。

漢字は経験をよびおこす信号である

私たちが、幼稚園で漢字を教えていることに対して、幼児に漢字を教えてどれだけの価

値があるか、大切なのは思想であって、漢字ではない。……と言う人があります。ほんとうにそうでしょうか。文章から漢字を取り去ったら、あとに何か残りますか。精神が大切なら、それを宿す肉体を大切にしなければならぬように、思想が大切なら、その思想を宿す漢字を大切にしなければなりません。

漢字は、私たちの知っている実体や行なったことのある経験を、頭の中に思い起こすための信号です。漢字を学習することは、実体を見たり、触れたり、経験して、その経験を漢字と結びつけ、漢字を見れば、すぐに実体や経験が頭の中に思い浮かべられるようになることです。

漢字が信号として速く脳に伝わり、速くそれに反応できる、それが『頭が良い』ということなのです。それには、漢字と、それに対応する実体や経験との結びつきを良くすることが必要です。

私の言う「漢字教育」とは、この「漢字と、漢字に対応する実体や経験との結びつきを良くし、漢字が経験を呼び起こすための信号として速く反応できるようにすること」なのです。

漢字指導が他の学習領域を侵すことはない

まえにも言いましたが、石井方式・漢字教育は、幼稚園の従来の学習領域を侵すものではありません。もし侵しているとしたら、それは石井方式ではありません。

大阪市を中心に始められたこの教育は、すでに一年以上経過しています。この漢字教育によって、他の学習領域が活発になり、効果が以前より上がっている、という報告が、私の所にたくさんきています。

中には、漢字教育に負担を感じている、他の領域の学習を侵している、という幼稚園もないではありません。しかしそれは、石井方式を正しく理解しておらず、正しく実施していないためで、正しく行なえば、絶対にそういうことはなくなります。

「漢字を教える」のではなく「漢字で教える」のですから、幼児のあらゆる学習活動の中で行なわれるべきものです。漢字が学習の直接の目標にならないように、漢字が「それとなく」使われる、というのが理想的です。幼児たちが、漢字学習をしているとは全く感じられないような学習が良いのです。

まず初めに私が行なったのは、幼児たちが「物語を聞く」学習であったわけです。幼児たちは、私の語る物語を静かに聞き、そのあらすじがわかれば、それでこの学習の目的は果たされることになります。その「聞く」学習の中に「漢字」が時々顔を見せる。幼児た

ちは、それをひとりでに(覚えようと意識をもっていないのに)覚えてしまうのです。幼児たちが漢字を覚えたことによって「聞く」学習が、何か失われたでしょうか。失われるどころか、「聞く」学習の効果は時々見せられる漢字によって高められました。黒板に書き並べられた漢字は、話が終わってもまだ残っていて、物語の展開のあとを子供たちに語りかけていました。漢字を見ることによって、物語の記憶が確められ、整理されました。

石井方式はあらゆる学習指導に適用できる

動物園に遠足に行った、その次の日の「絵を描く」時間です。黒板には、「遠足」次に「動物園」と書かれてあります。

「いろんな動物がいましたね。何がいちばんおもしろかった。」

「僕、象さん。」

「そう。象さんね。」

先生は、そう答えながら、「動物園」の次に「象」と書きました。

「象さんのどんなところがおもしろかった。」

「長い鼻で、食べ物をつかんで食べてた。」

「そう、長い鼻だね。」

そう言いながら、続いて「長い鼻」と書きました。こうして、先生は、きのうの遠足の経験を、子供たちに尋ねては、それを思い出させ、そのうち、絵になりそうなものを、漢字で書きつけていったのです。こうして黒板には、「猿」「白熊」など、いろいろの動物の名前が書き並べられました。

石井方式 漢字の教え方



こうした話し合いの後に、絵を描き始めたので、子供たちは、初めて見る漢字でも、この話し合いの中で、ほとんど覚えてしまいます。関心をもつて見るものは、子供たちは覚えずにはいられないのです。しかも、覚えてしまった漢字は、逆に、きのうの経験を呼び起こす「信号」になり、これが子供たちの描く「遠足」の絵を豊かな、生き生きとしたものに導くのです。

この指導をなさった先生は、どなたもおっしゃっています。「漢字で指導するようになって、子供たちの描く内容が豊かになりました。今まで子供たちがなかなか書けないでいる時、呼び

水のもりて、黒板に私が絵を描いて見せると、子供たちはただその模倣をしたものですが、「漢字の呼び水」は決して模倣にならず（模倣しようとしても、しようがありません。）それぞれに個性ある絵を描かせてくれます。」

「漢字で歌唱指導」を行なった先生方は、次のようにおっしゃっています。

歌詞が何番もある歌は、一番、二番くらいは、歌詞をメロディーによく合わせて歌えるのですが、三番、四番となると、歌詞を暗記していないものですから、かなで書かれてある歌詞を見ながら歌うのです。

すると、どうしても、歌詞がメロディーからはみ出してしまうのです、曲が終わったのに、歌詞のほうが残っているのです。

ところが、歌詞を漢字で書いて見せると、曲に歌詞がちゃんと入るので、かなの場合

合は、練習しても練習しても、なかなかうまくいかないのに、漢字で書き表わしますと、練習しなくてもびたっとうまくいくのです。

結局、かな書きの歌詞は、読み取れないのです。拾い読みしているの、曲に追いつかないのです。

漢字で歌詞を書いて歌わせるようになって、歌唱指導の能率がとてもよくなりました。」

『折り紙』などの工作指導の場合にも、漢字を利用できます。図で説明する場合にも、書き入れる用語を、「折る」「切る」などと漢字で書いたほうが、一目でぱっとわかるので効果的です。

組の名前、幼児たちの名前、皆、漢字で書いてください。下駄箱など、かな書きされたものは、皆同じように見えて、先生が捜し出すのにも骨が折れます。漢字で書いておいたら、すぐ見つかります。

幼児も、自分の名前などすぐ覚えて、たくさんの方たちの友だちの中から、容易に自分の名前を捜し出すことができます。また、友だちの名前も隣から順々に覚えていき、こんなところから意外に漢字をたくさん覚えるものです。

『生活指導』の面で、漢字の効果が期待できるところは、少なくありません。ただ、口から耳に伝えるだけでは、幼児にはなかなか理解できませんが、耳に訴えるのと同時に目にも訴えて、幼児の『視聴』両器官を動員させたほうが、印象に強く残るのは当然です。漢字で指導することの効果は、実に明瞭です。

「左側通行」「静かに」「手を洗いましょう」……掲示は必ず漢字で書くことです。かなでは、皆同じように見えて、実際の用をなしません。漢字は、初めて見た時には読めま

せんが、教えたらすぐ覚え、覚えたらすぐ読めて、意味がすぐわかります。

名神高速道路が完成した時、標示の文字にローマ字を使ったところ、読み取るのに十数秒もかかることがわかり、高速道路には使えないことがわかりました。かなだと、数秒で読めるが、これでも秒速二十メートルの自動車の中からは読めません。これが漢字ですと、数分の一秒で読める。そこで、高速道路で用いる文字は漢字にしようということに決まりました。漢字は、かなの十分の一の時間で読み取れます。これが、漢字の長所です。掲示用には最適の文字です。

「はな」では「花」か「鼻」かわからない

「はな」

この字を見て、何か頭に浮かびますか。おとなでも、とっさには何も思い浮かびません。

子供は、

「は、な」と発音するだけです。ところが、

「花」「華」「鼻」「漢」

となりますと、字を見たときに、それぞれに特有のイメージが、鮮やかに頭の中に形作られます。

「花」と「華」とは、元来は同じ実体を表わした文字ですが、構成が違いますように、それぞれに違った雰囲気をもっています。漢字は、そんな微妙なところまで表現しているのです。ところで、「漢」を見たら、とたんに胸が悪くなるではありませんか。何だか、目の前に、あのねばねばしたいやな液体が見えるような気がして、おまけに、ずるずる、という音まで聞こえるような気がしてきます。

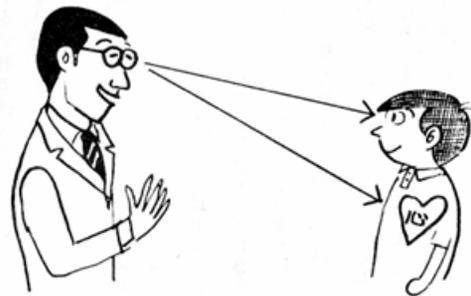
こういう生きた働きをもつ漢字は、幼児の印象に強く焼きつけられて、経験を鮮やかに、しかもすばやく呼び起こす「信号」となるのです。漢字の学習を重ねるに従って、幼児の頭の働きが、目立って活発になるのがよくわかります。

楽しいお話の中で自然に覚えさせる

先生の口から語られるお話は、テレビ以上に、子供を引きつける力をもっている、と私は思っています。子供の心の動きに関係なく、どんどんと進められていくテレビ物語よりも、子供と問答をまじえながら、子供の心の動きをつかみながら進めていくことのできる「生」のお話は、子供にとって楽しくないはずがありません。

子供の反応を伺いながら、子供の、ともすればそれようとする心を、話に引っ張り込む努力をして、お話を進めていくことは、大変なことではありますが、それだけにやりがいのある仕事だと思えます。

また、お話の種がすぐ尽きてしまっていて困る、という嘆きもよく聞きます。これは、「話のつぎ木」をなさったらいかがでしょうか。その一例として、一寸法師を桃太郎に「つぎ木」した、「一寸柿子」のお話を紹介しまし



先生のお話はテレビ以上に子供の心を引きつける

よう。

昔昔 大昔 ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。(ここまできると、今までかたずをのんで聞いていた子供たちは「知っている。」「桃太郎さんの話だ。」と口々に言い出します。そこで、「そう、桃太郎さんのお話とそっくりだね。でも、これは、桃太郎さんのお話ではありません。これから違って来るから、よく聞いてね。」と言って、子供たちをなだめます。)

ある日のことお爺さんが柴刈りをしていますと柿の木に赤い、大きい柿の実がなっているのが目にはいりました。

お爺さんはそれを見ると、食べたくなりました。そ



こで、お爺さんは、木に登っていきました。

お爺さんの手が、もう少しで柿の実に届くというところで、柿の実が、ポターンと落ちてしまいました。そして、コロコロ、コロコロと下のほうへ転がっていきました。

お爺さんは、急いで木から降りて、「こちら、柿や、待って待て。」と言いながら、柿の実を追いかけ始めました。でも、お爺さんは、年取っていて、速く走れないので、とうとう、柿の実が見えなくなっていました。

お爺さんは、がっかりして、追いかけるのを止めて、おうちへ帰っていきました。さて、お婆さんは、川で洗濯をすませ、うちへ帰って、お爺さんの帰りを待っていました。すると表の戸がコトンと音を立てました。「あ、きっとお爺さんのお帰りだよ。」

お婆さんは、「お爺さん、お帰りなさい。」と言いながら、戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて、赤い、大きい柿の実が転がっていました。

「おや、まあ、こんな所に柿の実が。だれが持ってきてくれたんでしょね。」お婆さんは、柿の実を拾って家に入り、お爺さんの帰るのを待っていました。

そこへ、「ただ今。」と言ってお爺さんが帰ってきました。(中略)二人で仲良く二つに切って食べようとしますと、柿の実が真中から二つにパツと割れて、中から、かわいらしい赤ちゃんが生まれてきました。赤ちゃんは女の子でした。

柿から生まれたので、柿子という名前を付けました。柿子はいくつになっても、生まれた時より大きくなりませんでした。一寸くらいしかありませんでしたので、皆が「一寸柿子」と呼ぶようになりました。

お爺さんとお婆さんは、ある日、神様にお祈りしました。「どうぞ神様、うちの柿子を大きくしてください。」

すると、ある晩、夢の中に神様が現われて、「都へ行きなさい。都に一寸法師がいて、

それが柿子を大きくしてくれるだろう。」と教えてくれました。

年を取ったお爺さんとお婆さんにはとても遠い都までは、歩いていくことができません。小さな柿子が歩いていくのは、なお大変です。三人は困ってしまいました。

そのうち、柿子ちゃんが、「私にいい考えがあります。お爺さん、私に風船を買ってきてください。お婆さんは、私に針を一本ください。」と言いました。(中略)

柿子は風船に乗って、空高く上っていきました。風船は都に向かって飛んでいきます。空からのながめはとてもきれいです。柿子ちゃんは、あっちこっちながめて楽しんでいました。

そのうちに、空が曇って、雨が降り出しました。柿子ちゃんは、頭からビシヨ濡れになりました。雷がゴロゴロと鳴り出しました。それでも、柿子ちゃんは元気に都のほうへ向かって飛んでいきました。

雨が止んで、お日様がニコニコ顔を出しました。きれいな虹が出ました。柿子ちゃんは虹の橋を越えて飛んでいきました。

ところが大変です。鳩が飛んできたのです。柿子ちゃんは小さいので、鳩にひと口で食べられてしまいます。さあ、柿子ちゃんはどうしたでしょう。

柿子ちゃんは、お婆さんにもらった針で、鳩をチクリチクリと刺しました。鳩は「痛い、痛い。」と言って逃げていってしまいました。

(中略) 柿子ちゃんはどうとう都の空まで飛んできました。きれいな家がたくさん見えます。柿子ちゃんは、風船の空気を少しづつ抜いて下に降りました。(以下略)

お話の筋は、その時の思い付きで、どうはこんでいこうと、話し手の勝手です。それが

『本』を読んで聞かせる場合と違った大きな特色です。また、これが幼児にとって大変な魅力でもあると思います。



話の途中で時々質問して子供たちの心を引きつける

子供たちの心を引きつけるためには、時々質問をするのもよいと思います。「柿から生まれた赤ちゃん、何という名前を付けたと思いますか。」とか。

また、「お婆さんが、お爺さんのお帰りだと思って戸を開けると、お爺さんではなくて柿の実だった。」という所で、「お婆さんは戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて……。」と言って、そこでちょっと休み、子供たちの顔を「さあ、何だろう。」というように見回しますと、いつも(たいてい)子

供たちの中から「柿の実。」という声が飛び出します。

ころころ転がって行って、見えなくなってしまった柿の実が、ここに再び登場してくることを、子供たちは期待しているのです。

物語から、柿の実は消えてしまったのですか、子供たちの頭の中には、ちゃんと残っていて、いつでも出てくるチャンスをねらっているのです。

子供たちは、ただ受身で、先生の話を聞いているのではないことが、こういうところでよくわかります。いろいろ推理を働かしながら、時には話し手よりずっと先のほうまで進んで、「早く来ないかなと言わんばかりに、待っている犬のように、先回りして待っているのです。

先生のお話をただ聞くというだけでなく、このように、推理しながら聞くというように

なりますと、子供の頭の働きはすばらしく良くなると思います。

こういう聞き方をする子供は、全神経をお話に集中して聞いています。心が決まれば、にそれたりなどしません。長い物語でも、決して飽きたような顔を見せません。

こういう子供に育てるためには、子供の一人一人に語りかけるようなつもりで（事実、一人一人に顔を移して、子供の目をちゃんと見て話すようにします。）話しますと、子供のほうもそれに必ず反応してきます。

落ち着いて、人の話を注意深く聞ける子供を育てるのは、先生の責任です。先生の、毎日の話し方の上手下手が、子供の「話を聞く態度」を作るのです。先生は「話し方」の工夫をすることに努力しなければなりません。

テキストを使って指導する方法

幼児のための「漢字の絵本」を、幼稚園のテキストとして作りました。テキストなしに、今まで述べてきたようなことを、うまくやっていただければ、それですばらしい成果が得られるはずですが、テキストを使用すれば、上手下手なしにある程度の成果が得られますので、編集したものです。

幼文社発行のものは、十冊一組になっています。一年間で使っても、二年間で使ってもその園のご都合です。その使用法（指導法）について、少しく述べることにします。

テキストの表紙、裏表紙の裏側に、指導の原理、原則、注意事項が書いてあります。これらの各項については、お読みになってよく理解したつもりでも、時々（というよりも、本書を手にするたびに）繰り返して読み、誤ることのないようにしてください。私も、幼

児の指導に当たっては、常に読んで自粛自戒しています。私のように、二十年近く実行し、自分で考え出したものでも、時々読まないと手の抜けることがあるものです。

これは指導がむずかしいということではありません。教育というものは、「丹精」ということが大切だと思っからです。丹精が必ず結果に現われるからです。野菜一つ作るのも、雑草の一本を抜き、小石の一つを除けば、それだけ「でき」が違ってくるではありませんか。そういう意味で、私は、自分の書いたものを、心して読むのです。

〔漢字の絵本による指導例〕

Pーに、女の子が口もとを指さしている絵があって、ページの上隅に「口」という字があります。

△「この絵は何の絵ですか。」と質問し、子供たちのいろいろな答えを聞いて、

△「そう、女の子の絵ですね。何かしていますね。何をしていますのでしょう。」

△「そう、指でお口をさしていますね。お口が大きく開いていますよ。何かお話をしているようですね。何て言ってるんでしょうね。だれか言える人？」

△「先生はね、これはクチです」と言っている所だと思えますよ。」（上隅の口という字をさし示して）ここに、大きく口を開いたような形の字がありますね。これはクチという字です。（黒板に、ゆっくりと「口」を書き）クチ。いいですね。クチ。では、皆と一緒にこの字を読んでみましょう。はい、クチ。もう一度はい、クチ。皆さん、とてもよく読めました。」

P2

△「一番上のここに、口の絵がありますね、その下にあるこれは、昔のクチという字です。ちょっと絵のようですね。でも、これは昔の字なんです。その下にあるのは、今のクチという字ですね。これは、前に習いましたね。今の字は、まっ直な線で書きますから、四角い形になっていますよ。」

△「これは、何の絵ですか。そう、メですね。目の絵です。その下にあるのは、昔のメという字です。桃太郎さんの習った字ですよ。その下にあるのが、今のメという字です。今の字は、四角い形ですね。桃太郎さんは、こっ



象形文字は簡単に覚えられる

ち(上)の字は読めますが、こっち(下)の字は読めませんよ。桃太郎さんが出て来て、この字読めないって言ったら、皆さん、教えて上げましょうね。」

△「これは、何の絵ですか。耳ですね。耳の絵です。その下は何ですか。(答えがなかったら、口、目の例から、それが『昔の字』であることを類推させます。)そう、昔の耳という字です。よくわかりましたね。えらいねえ。では、その下は何でしょう。はい、そうです。今の耳という字です。よくわかりましたね。」

△「では、先生が黒板に字を書きますから、皆さん、元気に読んで下さい。」「口」「目」「耳」をゆっくりと書く。」「これを繰り返して読む。」

毎日、本を出して読ませることが大切です。一日、一ページから二ページ。一冊を一月で終えるか、二か月で終えるか、それに従って適当に割り当ててください。

一回の指導は、五分から十分くらい。気分転換のつもりで、何かの学習に飽きを感じ出した時に、この本を取り出して、前に学習した漢字のおさらいなどをしますと、元気をいき返します。

心理学者の実験報告によりますと、学習した事柄を忘れるのは、学習後一時間以内が最も多いそうです。一時間以後は忘れる割合がだんだんと少なくなっていくのです。

だから、学習した漢字を、四、五十分たってから、つまり、間に何か別の学習、または休み時間をおいて、おさらいをするのが、漢字学習の上では最も有効な方法です。

一般に、『記憶』の原理は『関心』と『反復』だと言われていますが、一般的な復習の時期は、

- ① 一時間以内
- ② まる一日後

- ③ 一週間後
- ④ 一か月後

というように、記憶期間がだんだん長くなるのに応じて、間があいてもよいようになります。しかし、いくら反復しても悪いことはありません。むしろ、反復することにより、必ずそれだけ記憶は強固になるのですから、できたら、どの学習の時でも常に初めからおさらいすることに努めたいものです。

〔漢字の絵本 (二)〕

文字は、漢字から学ばせることが「絶対に」必要です。理由はあとで述べます。ともかく、実体に即して漢字が存在することを幼児に理解させ、幼児たちが、「文字とは、内容(実体)のあるものを表わす符号」であることを、理屈でなく、体で理解させるように

努めます。

これがわからないうちに、かなを教えますと、「木しゃ(汽車)が木(来)た」という書き方をするようになります。今の小学校では、この誤りを犯す子供が多く、先生はそれを直すのに手を焼いています。漢字を先に理解させる石井方式で学習した子供は、絶対にそういう誤りをしません。

かなは、本末、音声だけを表わす字ですから、内容をもたない「テニヲハ」や「用語の活用語尾」など、漢字の補助として用いるのに適した文字です。

「漢字の絵本 (二)」は、そういう考え方に基づいて「かな」を提出しています。かなを覚えることは、漢字に比べてむずかしいですが、漢字の補助として、漢字といっしょに覚えやすく、案外早く覚えられるようです。



この文の中には、すでに知っていて読めるのは「顔」だけです。従って、実際、丸暗記して読むのに近いのです。こうして、一字一字をわからず読んでいくうちに、「笑」「良」「泣」「悪」という漢字が印象に残るようになります。そこで、これらを漢字カードに作り、「笑うー泣く」「良いー悪い」というように、対比させて掲示し、対で理解させるようにします。

一字一字は読めませんから、全体を暗誦させるようなつもりで、調子よく読ませることが大切です。

みせ、それを子供に模倣させます。

「笑っている顔は、良いお顔。泣いている顔は、悪い顔。」を、続けて調子よく読んでみせ、

「は」と「も」の使い方について、いろいろ別の例を多く引いて理解させます。

P2~3

P 4～5

「赤い目」「青い目」になるように、にそれぞれの色を塗らせましょう。

「赤い」「目」「の」「兔さん」をそれぞれカードにし、ばらばらに掲示しておいて、これを正しい順序に並べさせる仕事を課してみましよう。

P 6～7

「ナ」が、昔はで、手の形を表わしていて、「手」のしるしであることを教えま

す。
「右」という字が、「手」と「口」とでできていることを理解させます。次に「右」は、「口」と仲良しの手であることを理解させます。

「左」の「エ」を茶碗に見立てます「左」という字が、茶碗を持つ手であることを

理解させます。

この時、茶碗を持って、御飯を食べるまねをさせます。そして「はい、茶碗を持つ手を上げて。」「はい、それがこれ(左)ですね。」「では、お口に行く手、お口と仲良しの手を上げて。」「はい、それがこれ(右)です。」「

P 10～11.

「小犬」の「小」と「子猫」の「子」と、発音は同じく「こ」だが、意味が違ふこと、また、どのように違ふかを理解させます。

たとえば「大きい子犬」という表現を使って理解させます。「子」は「親子」の「子」で、子供の意味。だから、「大きい子犬」だっていることを理解させます。

「馬」「牛」「羊」「が(二枚)」「も」「いるよ(三枚)」の九枚のカードを作り、これを

順序よく、

「馬」「が」「いるよ」

「牛」「が」「いるよ」

「羊」「も」「いるよ」

と並べさせる仕事をやらせます。

また、馬と牛と羊の順序を入れ換えて、これを読ませます。

読み方や書き方をいっぺんに教えてはいけない

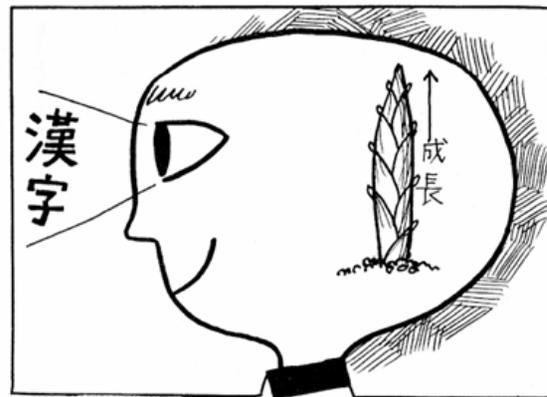
子供に漢字を与えるのは、植物に肥料を与えるのによく似ています。肥料を施したからと言ってその場で、その植物がニョキニョキと伸びていくわけではありません。

むしろ、肥料を施したことを忘れた頃になって、その肥料が根から吸収され、いつとはなしにそのきぎめが現われてくるものです。

漢字もそのように、「教えた。さあ覚えなさい。」というわけにはいきません。教えられた漢字が、いつとはなしに頭に刻まれて、読めるようになるのです。

私が、明治以来の『読み書き同時教育』を否定しているのは、そのためです。初めて漢字が出てきたところで、読み方・意味・使い方・書き方をいっぺんに教え、同時にできるように要求する、こんな無理な学習をなぜするのか。私は、このことを考えると、いつも腹の立つ思いです。

ある漢字が『読める』『意味がわかる』『書ける』と言っても、そこには習熟の程度やその期間によって、いくつもの段階があるのです。習熟を重ねるに従い、期間を経るに従って、その質が向上していくのです。どんなに練習したところで、目に見えてすぐに向上



漢字を覚えていく様子は植物の成長の仕方に似ている

するものではありません。

植物の成長する様を観察しますと、絶えず、ずるずると伸びているのではないことがわかります。ひょこん、ひょこんと伸びるのです。変化しない時期と飛躍する時期とあるのです。

もっとも、変化しない時期があると言っても、それは外から見えないというだけのことであって、内部では、どんな変化をしているかわかりません。

幼児が漢字を覚えていく様子も、この植物の成長の仕方によく似ています。覚える時は驚くほどいっぺんにたくさんの漢字を覚えます。しかし、ある時期は、覚えるのを休ん

でいるように見えます、

よく覚える時には、頭がよく働いていて、覚えないうちは、頭が休んでいるのでしょうか。決して、そう単純には言えないと私は思います。覚えるのを休んでいる時こそ、整理するために、頭が大活躍しているかもしれないのです。

ともあれ、幼児の漢字を覚える仕事は、機械が物を処理する仕方とは本質的に違っていい、という事実を認める必要があります。

漢字は忘れた頃に覚えられる!?

提出した漢字を幼児たちが習得しないいうちは、決して次へ進まない。という先生がよくあります。

これは、幼児の漢字を覚える覚え方について理解がないためです。幼児の言葉を覚えていった、その覚え方をよく考えてみてください。幼児は常にたくさんの言葉を耳にしています。それを、その中からどれということもなしに、いつもなく身につけていっているのです。一つの言葉を覚えないうちは、他の言葉は教えない、というやり方で言葉を教えたら、幼児は言葉が使えるようにはとてもなれないだろうと思います。

漢字の場合も同じです。確かに今までの漢字教育（今でもそうですが）は、一つ一つ順序を立てて提出し、その場でそれを習得するように要求してきました。私は、それが合理的に見えて実に不合理だと言うのです。

漢字を幼児に与えたら、それを覚えようと覚えまいと、知ったことじゃあない、幼児に漢字を与える、それが仕事で、その仕事が済んだら、あとはお役目放免、先生はそんな気持ちでいなさいというのが「石井方式」です。

教師が漢字を指導したことなど忘れてしまった頃になって、漢字は徐々に幼児の頭に吸収され、たくわえられるのです。

「天災は忘れられた頃にやって来る。」と言いますが、「漢字は、教えたことを忘れた頃に覚えられる。」と言えるのではないのでしょうか。

先に聞いた言葉を覚えないうちは、後に聞いた言葉は覚えられない、ということがあり得ないように、一つの漢字が覚えられないうちは、次の漢字が覚えられない、というものでは絶対にありません。

覚えようが覚えまいが、次から次へと、新しい漢字を提出していく。すると、後から提出された漢字のほうを先に覚え、それが前の漢字に関連して、それまで覚えられなかったのに簡単に覚えられた、そういうことがよくあるのです。

「池」が与えられた。覚えられない。次に「海」が与えられた。すると、「池」と「海」

がいつペんに覚えられた。……こういうことが、実際には多いのです。

それは、先にも述べましたように、「池」が覚えられない時に、頭が休んでいたわけではなく、記憶作業は進行していたのかもしれませんが。ただそれが外に結果として現われなただけだったのかもしれない。

だから、「池」に似た「海」が新しく与えられたことによって、(それが刺激となって)「池」の記憶が完成したのかもしれないのです。

ともあれ、覚えようと覚えまいと、ひと所に止まっていることのないようにしてください。停滞は禁物です。前進しましょう。

物語を利用した指導 (テキストを使った指導の続き)

第五冊から第十冊までは、物語です。物語の扱い方について、お話ししたいと思います。

いずれも、初めて見る漢字が、かなり多く使われていますので、子供たちに、独力でこれを読むことを期待しても、それは無理です。

初めは、お話を聞かせるような調子で、これらの物語を読んで聞かせます。この時、子供たちに、字をたどらせたいと思って、ゆっくりと読んでやりがちですが、これはいけません。

あとでその理由を申し上げますが、お話を聞く場合でも、文章を読む場合でも、全体の意味を正しくとらえるために適当な速度というものがあるのです。むしろ、遅すぎるよりは、速すぎるくらいの方がわかり良いものでして、一般に、ゆっくり話したり、ゆっくり

り読んだほうがわかり良い、と考えられているのは間違いです。
 したがって、最初は、子供たちに文字をたどらせることなど考えないで、普通、お話を
 する時の速さ以上に遅くしないで、すらすらと読んでいくようにします。

お話を聞く場合でも、物語を読む場合でも、同じものを繰り返すことの楽しみと、新し
 いものを聞く（読む）楽しみとあります。

子供でもおとなでもそうですが、たいていどちらの楽しみをもっています。物語を知
 りつくっていて、ここはこう、あそこはどう、安心して知りつくした道を散歩するような
 楽しみに似ています。

それと反対に、未知の土地を旅する時のように物語がどうなるだろうかと、心をおどら
 せながら聞く（読む）楽しみがあります。

幼児には、とりわけ、同じものを繰り返し巡すことを楽しむ性質が強くなります。繰り返す

ことによって、それを身につけ、自分のものにして
 成長するためにそれは必要な性質です。だから幼児
 にとりわけ強く備わっているのでしょう。

この絵本の物語は、繰り返し読んで聞かせて、幼
 児がそらで言えるまでにしてやりたいと思います。
 それには一節一節、復唱させるようなやり方で、読
 ませるのもよいと思います。

幼児は、文字が読めなくても、おとなのまねをし
 て、本を読むまねをしたがるものです。だから、先
 生のとをについて復唱することは、やさしくできて、



幼児には同じことを繰り返すことを楽しむ性質が強い

しかも結構幼児に満足できることです。

物語が暗誦できるようになりますと、言葉と文字とを対応させて、どの字は何という字かを考えるようになり、目立った漢字からだんだんと覚えていきます。

物語に出てくる漢字は、取り立てて教えてやらなくても、長い間には、前後の関係から判断して読み、読んで覚えるものですから、取り立てて教える必要はありません。

また、知らない漢字を、前後の関係から判断して読むことは、思考力を伸ばし、頭の働きを良くする働きがありますので、教える代わりに質問して考えさせましょう。

提出の場をいろいろ変えてみる

物語の漢字が、前後の関係で読めるようになったら、その漢字をカードにして、子供た

ちの認識をさらに深めるようにしましょう。

物語の漢字は、物語の中では読めても、カードで出されると読めなくなることがよくあります。どこで、どんな形で出されても読めるよう、認識を深める工夫をしてやらなければなりません。

ある有名な学者の話ですが、ある日、駅で会った人から声をかけられたが、確か見覚えのある顔だと思っただけで、だれだか思い出せない。気になっていたところ、翌日、隣の庭でその顔を発見した。「何だ。お隣のご主人だったのか。」というわけです。

いつも隣というきまりきった状態で会っていたのに、思いがけなく異なった場所で会ったために思い出せない、ということはよくあることです。

結局、隣という条件を頼みにして認識を深めることをしなかったためです。漢字の認識を深めるためには、提出の場をいろいろ変えてみる必要があります。

拾い読みは読書力を低下させる

幼児たちが、記憶を頼りにして、漢字をたどりながら本を読もうとしても、かなはたどらせないほうがよろしい。

かなは表音文字であるから、幼児たちは、どうしても「あ、る、ひ、お、ば、あ、さ、ん、が……」というように、かなを一字ずつ拾って読む、ということになります。

戦後の教育では、「拾い読みをさせないように」ということで、「う」「ま」というように、一語をまとめて教え、初めから「う、し」「う、ま」と分解して学習させないようにしましたが、これも成功しませんでした。

私は、昭和二十八年から五年間、石井方式と文部省の従来の学習法との比較実験をやりましたが、最初から漢字で学習する石井方式で育った子供と、最初はかなから学習する学習法で育った子供とは、読書の速度が本質的に違うことがわかりました。

五、六歳児の読書の速度というものが基礎になって、その後の読書の速度が規定されるのです。初め遅い者は、大きくなっても遅く、初め速い者は、大きくなるにつれてますます速くなるのです。

石井方式で育った子供は、小学校の三、四年生になれば、私たちより速く読書し、しかも正確に内容をつかみます。私など、かなから学習したものですから、情けないことに、子供に負けてしまいます。

読書は、ある程度スピードがないと、文意がつかみにくい、と前に述べました。それはなぜでしょうか。

それは、日本語の性格として、「文章を、初めから終わりまで、ひと息に速く読み通さ

ないと、文意をつかむことがむずかしい。」という性格があるのです。

たとえば、「昨日、私は、東京駅へ、友人の見送りに、行きました。」という文を例に考えてみます。

「昨日」「私は」「東京駅へ」「見送りに」という言葉は、それぞれには全くつながりのない言葉であって、これだけ聞いたのでは、まことに支離滅裂という感じで、文意もつかみようがありません。これは、

昨日、行きました。

私は、行きました。

東京駅へ、行きました。

見送りに、行きました。

という関係にあるのですから、「昨日」から「行きました」まで、ひと息に読み通さな

いと、統一がつかないのです。

石井方式 漢字の教え方



かなの文章題では文意がつかめず式がたてられない

がつかめないことが少なくありません。電報文など、短くても、何回か読み返すことがよくあります。

小学校の算数で、文章題（応用問題）の成績の悪いのも、原因はここにあることがわかりました。石井方式で教育された子供は、文章題が得意であるというのがその証拠の一つです。

また、「家庭で文章題をやらせるとできるが、なぜ学校ではできないのだろう。」という母親

の相談をよく聞きますが、これは、文章を母親が読んでやって解かせるから、文意がつかめるのであって、学校では、自分で読むので、スピードがなくて文意がつかめず、したがって式を立てることができないのです。

読書の際のスピードは、単にスピードと考えるだけでなく、読みたいと思います。つまり、最初の読書を、拾い読みさせないような配慮が絶対に必要だ、ということをお忘れしないでいただきたいと思います。

かなはどうして教えたらよいか

小学校に進むまでには、かなも一通り読めるようにしてやる必要があります。今の小学校では、かなが一文字も読めないような状態で就学したら、一学期の学習は大変苦しいも

のになります。

昔の一年分の学習に当たるほどのものを、一学期くらいでやり終えるのですから。しかも、その学習時間は、昔の半分ほどに減っているというのに。

都市の幼稚園の調査によれば、卒園時にはほとんど全員が五十音を読めるようになってくるそうです。このような実態を示している時に、かなの学習は小学校へ進んでから、などのんびりしていますと、子供が学校に適應できなくなってしまう恐れがあります。

かなは表音文字ですから、石井方式では、その本質にかなった使い方、これを学習させます。「漢字の絵本(五)」以降で、そういう学習が計画されています。

「お爺さんは、山へ柴刈りに行きました。」のところ、

行かないよ

行きました

行くこと

行けばよい

行こうよ

という変化を通じて、「かきくけこ」を学習させるのです。私は指導主事をしていた時小学生が「行」は「い」という字だと言っているのを聞いて驚いたことがあります。そういう教え方をしている先生が多いのです。

「行」は「いく」という意味の漢字だ、と教えるてはいけません。ただ、この言葉は、「牛」「馬」と違って、「いか」となったり「いき」となったりするので、変化する「かきくけこ」をつけ加えるのだ、ということを理解させるのです。

もし「行ないよ」とあったら、「いかないよ」と読んで、絶対に「いないよ」などと読まないようにしなければいけません。今の中学生でも、「行ないよ」を「いないよ」と読

む者がかかなりあるのではないでしようか。

石井方式では、幼稚園児でも「いないよ」と読む子はいないようにさせています。

(3) 小学校における指導

石井方式の基本原則と実施の方法

石井方式には、二つの基本原則があります。

(一) 社会で、一般に漢字で表記している言葉は、常に(したがって最初から)漢字で表記して提出しなければならない。初め、かな書きで学習させ、それに習熟させた後に漢字を学習させる、今の学習法は、絶対に止めるべきである。

(二) 社会科用語は社会科で、理数科用語は理数科で、提出し、指導すべきである。今まで、「国語教科書に提出され、指導されていない漢字は、他教科には提出すべきではない。」とされているが、この考えは改めなければならない。

現在は、石井方式の教科書がありませんので、従来の教科書を、右の原則に照らして、表記を改めることとなります。その改め方には、①かな言葉の上に漢字言葉を印刷した小片を貼りつける。②全文を石井方式の表記に改めたプリントを用いる。③かな言葉のわきに漢字を書き入れる。……などの方法があります。

①の場合は、たとえば、「がっこう」というかな部分がちょうどうまく隠れるだけの大きさの部分に「学校」とはいるように印刷したものを用意し、子供たちの手で、これを教科書に貼りつけさせます。



私自身は、常に①の方法でやりました。初め数回、子供たちに貼る仕事を指導して行ない、あとは毎回、家庭作業にさせたこともあれば、母親の援助で貼りつけを行なったこともあります。

亀田、桃山、富士市須津などでは、学校で国語の時間に貼らせています。時間はかなりかかりますが、貼るために、子供たちが注意して文を読むので、それが良い学習になる、と言っております。

ひと口に基本原則と言っても、その適用にかなりの相違があります。亀田では、当用漢字であるかないかにかかわらず、社会で一般に漢字で表記している言葉は、すべて漢字で表記しました。

富士市須津小では、範囲を当用漢字に限り、当用漢字でないものは、かな書きにしました。熱海市桃山小では、最初は、範囲を教育漢字に限り、教育漢字でないものは、かな書きにしました。

学校によれば、学年配当の漢字を、一年または二年早める、という方法を採用しているところもあります。それでも一応石井方式と言ったことができます。

つまり、同じ教材でも、次のような違いが出てくるわけです。

(亀田小) お百姓は、ふるふる震えながら「これはこれは天狗様。私は決して逃げません。その代り、私の願いを聞いて下さい。」と言いました。

(桃山小) お百しょうは、ふるふるふるふる震えながら、「これはこれは天ぐ様。私は決してにげません。その代り、私の願いを聞いてください。」と言いました。

こんなに漢字が多い文章では、子供にはとても無理だろうと思いがちですが、それはおとなの誤った固定観念で、事實は、子供には、このように漢字の多い文のほうが読みやすいのです。

かなが全部読めれば、かな書きの文は全部読めるはずだ、一年生の子供にはかなばかりの本が読みやすい、と思うのも、誤った固定観念です。

一年生には、初めて読む文は、かなばかりの文でも、なかなか読めるものではありません。文字をただ発音するだけで、それをまとめて言葉としてとらえ、さらに文としてとらえることはできるものではありません。

それで、*読解指導* ということがあるわけです。漢字だと、教えられない限り読めませんが、一度教わりますと、初めから文字を言葉としてつかむことができますので、すぐにすらすらと読めるようになります。

漢字は一年生で学んでも六年生までに覚えればよい

漢字を取り立てて、特別に指導しないのが石井方式の特徴です。ただ、読めないで、つまり読んでいる時に、その読み方を教えてやるだけです。意味がわからないようだったら、意味も教えてやります。

決して、初出で、その漢字が読めるようにしようと思ってはいけません。一度学習した漢字が、二度、三度繰り返し返されて、それで読めないでいても、やはり最初の時と同じように、軽くその読みを教えるのです。

そして、繰り返し、繰り返し提出して、何十回になろうとも、読めるように、頭にはつきりと刻みつけられるように導くのです。

読めるようになったら、ますますそれを使う機会を作って習熟させます。算数の文章題に、理科や社会科の説明に、掲示に、あらゆる機会を求めてその漢字を使用することに努め、自然と習熟させるのです。そうすれば、字形についての認識も、しだいに深まってきます。

その言葉とともに、字形も思い浮かべられるほどに習熟した頃を見はからって、**「書く指導を行ないます。すでに頭の中に描けるようになった漢字を、どこから書き始めて、どのように完成させるかを教えるのです。」**

従来の **「書く」学習と違って、いっぺんに整った字を書くようになります。子供たちも楽しんで書きます。**

昭和三十六年「朝日ジャーナル」で **「漢字をめぐる諸問題」**を話し合った時に、輿水実氏が、「日本では、漢字が最初一回出たところで覚えさせる原則です。だから、子供としては、あとは、家で書き取りをやる以外はない。」とおっしゃっていましたが、それが事

実です。

しかし、こんな愚かしい指導は、一日も早く止めるべきです。自転車を与えて、「さあ たった今乗れるようにしなさい。」と言って、だれが乗れるようになりますか。そうでは なくて、自転車を与えて、あとはほっておけば、だれだって乗れるようになります。

漢字だって、初出で、読み書きともにできるように求めても、それはできませんが、気 長に反復練習させれば、だれだってできるようになります。

それよりも、なぜ初出で、読み書きできるのを求めるのか、私にはその理由がわかりま せん。私は、六年生配当の漢字でも、一年生で提出する機会があれば提出します。しかし、 「提出したから覚えろ。」ではありません。できるだけ、目に触れる機会を与えて、六年 生を終えるまでには確実に習得させよう、という考えなのです。これが、石井方式です。

プリントを利用して読む習慣をつける



テストのために覚えた漢字はすぐ忘れてしまう

短期間に処理して覚えたものは、忘れるのも早 いものです。とりわけ、テストのために覚えたものなど、テストが終われば忘れてしまうのが普通です。

漢字などのように、一生使うものの学習は、長 期間にわたって、ゆっくりと学習を重ねなければ、 決して身にはつきません。だから、石井方式では、 “新出漢字” という特別の扱いはしません。

その代わり、できるだけ漢字を読む機会を作っ

て与えます。そのため、普通の先生なら、話ですませるものでも、黒板に書きつけて読ませます。

また、プリントも毎日作って与えます。私は、ほとんど毎日、原紙に二枚は、子供たちに読ませるための教材を作って与えました。それは大変ではありますが、子供たちに「読む習慣を与えるためにぜひ必要だと思ったからです。」

どんな授業でも、分析したら、「聞く」活動が大部分を占めるでしょう。「話す」「読む」「学習でさえも、それは一人だけの活動であって、他の子供たちは、それを「聞く」しているのです。」

だから、国語の学習としては、だれもが「読む」「書く」学習をするような工夫をする必要があると思います。私は、そのために、毎日、プリントを用意し、それを「読み」、それから「書かせました。」

プリントには、多くの漢字が使われていて、だれでもそれを読まないことには、国語の学習が進められないようになっていきます。問題を読んでは、その解答を書き、問題を読んでは解答を書くのです。

では、その一例を下に掲げます。

源五郎鮒を読んで、次の質問に答えなさい。

一、源五郎さんは何を持っていましたか。

(答、不思議な太鼓を持っていました。)

二、それはどうして不思議なのですか。

(答、鼻が高くなったり、低くなったりするからです。)

三、不思議な太鼓で鼻を高くするには、どうするのですか。

(答、大鼓の片方をたたいて、「鼻、鼻、高くなれ。」と言います。)

四、源五郎さんはどんなことをして、大勢の人に喜ばれましたか。

(答、太鼓をたたいて、大勢の人の鼻を高くしたり低くしたりして喜ばれていました。)

右は、私が、一年生の国語の学習で実際に作ってやらせたものです。一年生でも、こういう問題を、自分で読み、それに応ずる解答を書くことができるのです。

算数の問題も楽しくなる

算数も、文章を読んで、式を立てて計算をする「文章題」を、毎日、プリントにして与えました。子供たちは、この文章題を解くのが楽しくて、一日でも休もうものなら、不平を言うほどでした。

左にその例を掲げましょう。

1 春夫さんの前に 3 人後ろに 4 人並んでいます。皆で何人並んでいるのでしょうか。

(答、3 人+1 人+4 人=8 人)

2 ケーキが 12 個あります。4 個ずつ 2 人にやりました。何個残っていますか。

(答、12 個—4 個—4 個=4 個)

3 花子さんは、色紙を 14 枚持っていました。妹に 8 枚やりました。残りは何枚でしょう。

(答、14 枚-8 枚=6 枚)

4 時刻に合うように、長い針と、短い針を書き入れなさい。

(あ) 9 時半 (い) 6 時 (う) 12 時半

(時計の絵、省略)

5 上の時計のうち、朝起きる時刻に一番近い時刻の時計はどれですか。(あ) (い) (う) で答えなさい。

6 夜寝る時刻に近いのはどれですか。

石井方式で学習する一年生にとっては、こういう「文章題」を解くのは、クイズの遊びのようなもので、楽しくて楽しくてたまらないのです。

社会科の教材もすらすらと読める

予防注射

みんな並んで、保健室へ行きました。予防注射をするのです。内田先生が「良い子は痛くありませんよ。」とおっしゃいました。みんなきちんと並んで、番の来るのを待っています。とうとう僕の番になりました。僕は、胸がどきどきして来ました。目をつむって、手を出しました。ちょっと、ちくつとしたら、もう予防注射は終わっていました。「良かったね、これで病気がかからなくなるよ。」と、石井先生がおっしゃいました。

右は、一年生の、入学後、二、三か月たった頃の社会科の教材です。この時の新出漢字は「・」の付いた六つの漢字でした。

このプリントは第二時限に使用しました。第一時限で、「予防注射」と黒板に書いて、「予



社会科の教材にも漢字を使う

防」の言葉の意義から、学校へ行なう予防注射の意義についてお話をしておいての第二時限です。すでに言いましたように、初出で覚えさせようとは思いませんから、「予防注射」が読めることは期待していませんが、このプリントを配りますと、「予防注射。」と読む声があちこちから聞こえます。

さて配り終わると、指名読みさせます。新出

漢字でも、「保健室」「待つ」などは、前後の関係でたいてい読みます。入学時には、一つの漢字さえ読めなかった子供たちが、わずか二、三か月で、この程度の文は、いきなり読ませて、かなりすらすらと読むようになります。数人に指名読みさせてから、斉読させます。斉読といっても、私は、かなりのスピードで斉読させます。普通の話をする程度より遅くさせません。

性急な学習は効果が少ない

前にも述べたことですが、「何回練習したんだから、覚えてもらわなくては……」と、子供に期待してはいけません。何回でも覚えるまで提出を繰り返すのが教師の役目だと考えることです。

従来の「初出の時に習得をねらう」漢字指導は、教師にとっても大変なことであり、子供にとってもかわいそうなことです。やっでできることではないからです。こんな性急な学習は、一時的には覚えられても、必ず、間もなく忘れられてしまいます。

私の指導は、漢字こそたくさん提出されますが、指導者が「覚えなさい。」と騒ぎませんから、子供たちも漢字を覚える義務感に責められることはありません。にもかかわらず、数多く、反復して読まされるので、いつとなく結構覚えていきます。

また、読めるようになったからといって、漢字についての認識は、いっぺんに深まるものではありませんから、習得できたと思っても、なお繰り返し提出して読む機会を与える工夫が大切です。そうしてこそ、表現しうる「漢字力」に育つのです。

石井方式実施校の指導計画

全校あげて石井方式に取り組み、これを三年にわたって実践した、新潟県亀田町の亀田東小学校は、すばらしい成果を見せてくれました。

昭和三十七年四月、全国に先駆けて実施し、昭和四十年の三月まで続けられましたが、この年、隣接校に合併されたため、その実践が打ち切られてしまったことは、実に残念なことでした。

ここに、その「教育指導計画」を紹介します。

漢字での教育指導計画（第二年次修正案）

——昭和三十九年度——（亀田東小）

一、目標

- (1) 漢字を効率的に習得することにより、文の読解力を伸ばす。
- (2) 漢字を効率的に習得することにより、言語生活を拡充し、表現力を伸ばす。
- (3) 漢字の 〃形・音・義 を理解することにより、記憶と言葉の概念把握を一層確実にする。
- (4) 漢字の習得に伴い、推理・判断・洞察等思考力の伸展を図る。
- (5) 漢字での学習を進めることにより、自主的、意欲的学習態度を伸ばし、学習効率を高め、学力の向上を図る。

二、指導の基本

I 基本原則

- (1) 社会で、一般に漢字を用いて表記している言葉は、一年の最初から漢字で表記し



六か年の間に習得させる気持ちでくり返し指導する

て提出する。(但し、一応のめどは当用漢字に置く。)

(2) 漢字提出は、訓読みから活用された形で現出する。(低学年では訓読みが多く、高学年になるにつれて音読みが多くなる。)

(3) 社会科学用語は社会科で、理、数科用語は理、数科で、というように、各教科或は特活等で、実際に即して提出し、指導する。

(4) 漢字・平かな・片かなは、区別することなく、一語一表記として指導するので、学習の順序に先後の関係はない。

(5) 漢字を読むことと、書くこととは、併行して習得されるものでなく、漢字の形・音・義がよく理解され、深い読みに入ってから、書くことを指導する。

II 留意点

(1) 文字に対する認識は、一度で深く正確なものに到達することは不可能に近いこと

である。故に、漢字の習得は、早く提出して、反復練習する機会を多く持つよう
うにすることが大切である。

(2) 従って、この時間にどうしても習得

させなければならぬと考えるこ

とは、徒らに、子供も教師も負担感

に悩まされて、ついに漢字学習が嫌

いになる恐れがある。早く提出して、

繰り返し読み書きさせることによ

り、六か年の中に習得させるような

気持ちで指導することが大切である。

(3) 提出に当たっては、児童の日常生活に

必要な言葉、関係の深い言葉、使い馴れている言葉、親しみやすい言葉をよく選
択して提出するようにし、徒らに難解の漢字提出に陥らないようにしなければな
らない。

- (4) 書くことを早く身につけさせようとして、読むことと同時に、書くことを併行し
て指導していかうすることは避けなければならない。その漢字を、何回も提出
することにより、浅い読みから深い読みに進展し、その 形・音・義 がよく認
識される。その段階に入ってから、書くことの指導に入っても遅くはない。む
しろ、その方が望ましいことである。ただ、左から右、上から下というような
筆順の原則的なことは、比較的簡単な文字により、はっきりと習得させることが
大切である。

- (5) 字源的、検収的取り扱いによる指導は、興味を持って学習するので、印象が深く
なり、記憶に便である。象形文字などは、低学年でも興味を持つ。高学年では、
さらに分析的、系統的な指導が効果的である。

- (6) 一つ一つばらばらに学習した漢字は忘れやすいが、類語、反対語、関連語等によ
り、広い背景に関連させて、漢字を学習することは、理解を助け、記憶を確実に
するのに有効である。

- (7) 漢字と言わず、文字習得における文字環境の占める位置は大きい。身のまわりに
漢字が多ければ、それだけ漢字に親しんで、習得が容易になる。環境構成につい
て、掲示、プリント、通信等、機会と場をよく利用し、基本原則(1)によって、
これを行なう。

- (8) 作文は、低学年では急がずに、口頭作文、共同作文、絵はなし、お便り、範文書
写、短文作り等に力を注ぎ、習得漢字の活用により、その能力を培っていくこと

が大切である。

- (9) 漢字の習得は、実生活において使用し、活用しなければ、真に身につくものではない。手紙、日記、ノート、メモ、作文などで活用するほど、身につくものであり、中・高学年では、辞典等も利用して、できるだけ多く使用させることが望ましい。

- (10) 必要と興味は、あらゆる学習の基本原則である。カルタ遊び、カード利用、読み書き競争、語彙集め、字源しらべ、辞典引き等、多様な扱いを工夫することも有効である。

Ⅲ 各学年の指導の重点

- ◎ 一、二、三、四年は基本原則の通りに実施する。

A 一、二年

- (1) 提出漢字は、日常生活の中で、特に使い馴れている言葉、必要度の高い言葉、親しみやすい言葉、理解しやすい言葉の中から、これを選択する。
- (2) 右項は、国語以外の教科でも同じように適用される。
- (3) 基本的な筆順は、それを指導するのに適切な漢字（川、三等）の書字により徹底させる。
- (4) 一度掲示した漢字は、できるだけ反復して使用し、できる限り、児童にこれを読む機会を与える。そのためには、例えば、いろいろな小さなプリントなどで、補充教材を、数多く与えるなどである。
- (5) 児童への注意や家庭への通信など、できるだけ板書して読ませたり、書き取らせたりする。
- (6) 作文では、留意点(8)にあるように、習得漢字の活用と語彙の拡充、文のきま

りなどの基本的な練習を図り、能力の基礎を伸ばすよう工夫する。

(7) 毎月の全教材、教科外活動、生活指導、行事等を包含した計画を立案し、毎月末にその成果を評価し、反省を加え、翌月の計画を立案する。(この項、各学年共通。)

B 三、四年

- (1) 中学年では、新出漢字が多くなるが、基本原則により、形・音・義をよく理解させ、特に音訓両面の指導により、漢字の正しい認知を漸次高めていく。
- (2) 一つの漢字を、類語、対語、関連語などの幅広い背景によって理解を深め、併せて語彙の拡充を図る。
- (3) 三年から、国語辞典の利用に馴れさせる。
- (4) 四年後期から、漢和辞典の利用もできるようにする。

- (5) 特設漢字の時間は、主として、辞典活用之力をつけるよう指導する。
- (6) 習得漢字を活用し、身についた能力とするため、作文、日記、記録、学級新聞、掲示、メモ等の表現活動を盛んにする。
- (7) 特に、作文は、生活文、記録などに、相当長文で記述できるように、本格的指導を行ない、推敲には、辞典を活用するよう指導する。

C 五、六年

- (1) 高学年の国語では、特に熟語としての新出、読替漢字が多いので、その指導には、音・訓両面の取り扱いとその応用、活用を図り、語彙の拡充と語彙の理解を深めるよう指導し、漢字の拡充を図る。
- (2) 他教科においても、できるだけ漢字を多く提出し、板書や書写等を通じ、反復練習の機会を多く与え、確実な習得を図っていく。



に馴れさせる。

(以上)

体系的科学的な新しい漢字学習

石井方式では、「漢字で教える。」と言って「漢字を教える。」と言うことを避けていますが、「漢字を教える」ことを全く否定しているわけではありません。

ただ初めは、「新出漢字」という改まった漢字学習ではなくて、「新しい言葉を漢字で学習する。」という考え方で、学習の目的を言葉におき、漢字はその学習のつきたりすぎないというように気軽に扱い、読む機会を反復することによってその認識を深めていく、という方法をとって、読める漢字の数をふやすことに努めます。

読める漢字の数がふえると、これを整理しまとめます。

意味の似たもの、反対のもの、

字形の似たもの、(休|体)

- (3) 作文指導は勿論、日常生活にも、既習漢字をできるだけ多く活用するよう、国語辞典、漢和辞典の利用と併せて指導する。
- (4) 特設時間は、特に辞典の利用と併せて、系統的、構成的、字源的指導により、漢字の知識を整理し、より確実な習得と、活用を図る。

- (5) できるだけ豊富な読み物、参考書等に親しませ、読書力を伸ばすと共に、その利用

発音の似たもの、(暑い―熱い)(険―検)

同じ仲間のもの、(口―目―耳―鼻)

ついで、部首による体系的、科学的な漢字学習に進みます。

漢字の大部分は、部首と呼ばれる部品の組み合わせによってできています。たとえば、当用漢字は一八五〇字ありますが、それに使われている部首は一九二個です。一九二個の部品がいろいろに組み合わせられて、一八五〇字の漢字ができあがっているのです。だから、一九二個の部品のもつ意味や性格を、その本質からよく理解していくなれば、一八五〇字の当用漢字はもちろん、それに数倍する量の漢字の意味、読み方まで、おおよそ推察することができるとです。

たとえば、「整」という漢字は、「束」^{ソウ}「攴」^{ボウ}「正」^{セイ}の三つの部品によって組み立てられています。これは、さらに、「束」^{ソウ}木、口(輪の形)「攴」^{ボウ}ノ(棒またはむち)、又(手)「正」^{セイ}一(線)、止(足の形で、とどまる意)と、それぞれ二つの部品によってできています。

「束」は、木に輪をかけてたばねる。「攴」は、手に棒を持ってたたく。「正」は、止まるべき線に止まる、つまり「ただし」の意味を表わしています。

だから、「整」は、木を束ねて、不ぞろいになった所をたいて、きちんと正しくすることを表わした字であることが、その部首を見ればわかります。

漢字は確かに字形が複雑で、機械的にかむしゃらに覚えようとしたらむずかしいものかなりあります。しかし、その部品である部首を一つ一つ理解して、これを論理的に学習するなら、これほどやさしく、楽しく覚えられて、しかも忘れにくい文字はありません。

「棋、期、基、箕」……其
「募、暮、墓、慕」……莫

複雑に見える漢字も、右のように整理してみますと、共通した部分が、それぞれの発音を表わしており、その上、その言葉としての基本的な意味をもつていて、それをおさえて学習すると、漢字の複雑さは、困難どころか学習を助けることがわかります。

このような、体系的、科学的な漢字学習法が、従来の漢字学習には見られなかったものを、私は新たにこれを打ち立てて、こういう学習をすべきだと提唱しているのです。学燈社発行の「石井方式・漢字の覚え方」は、こういう学習のために作られた本です。先生方のご利用を希望します。

石井方式は他の学科も理解しやすくする

石井方式では、「社会科用語は社会科で、理、数科用語は理、数科で提出し、指導すべきである。」と考えていますが、これは、石井方式の基本原則を実施すれば当然そうなるべきものですが、それ以上に、言葉を漢字とともに学習することが言葉の理解、および記憶を助けるからです。

「さんかく、ちよくせん、四しゃ五入、しゆく図、しゆくしやく、がい数、がい算」は算数用語ですが、これを漢字で表記するとずっと理解しやすくなります。

「くつ折、しょう点、地下けい、さ岩、でい岩」(理科用語)では、言葉の意味を理解することがむずかしく、記憶も安定しませんが、漢字なら理解しやすく、記憶が安定します。



理科、社会科用語もかな書きでは理解がむずかしい

か、学習負担が軽くなるのです。

教科書に漢字を貼ることは、時間を取り、児童にとっても大変な負担ではないか、と考えられそうですが、実は、そうではないというのが、これを実施している先生方の一致した意見です。

黙々と貼りつける作業の中で、子供たちは、静かな、深い読みの学習をしている、というのです。それは、他の方法では得られない貴重な、価値ある学習だということです。

実は、私自身は、母親の仕事にしたり、宿題にしたりしましたが、確かに、先生方のおっしゃるとおり、一見無駄な労力に見える、この漢字貼りは、そのために他の学習の何か削られたとしても、十分に償って余りある効果があることを、私は信じています。

それについて、新潟の亀山東小の草間完生（一年生担任）の次の記録を紹介したいと思います。

「十一月の研究会に出席された先生方が一番多く取り上げられた問題は、一年生の小さ

「だん流、こう水量、こう水、き権、内かく」（社会科用語）これらは、漢字で表記してこそ理解できる言葉であって、ぜひ、漢字で表記して指導していただきたいと思えます。

「他教科で漢字を教える。」と考えるからこそ負担になるように聞こえますが、実は、その教科学習に大切な役割を果たしている用語を理解しやすくするために、漢字で学習しているのですから、負担になるどころ

な子供たちが、あの細かい漢字カードを一つ一つ切って糊を付けて貼っていく、ということの大変さであった。

ところが、皮肉なもので、子供たちは漢字貼りが大好きなのである。先日こんな事があった。急用ができたため、明日の漢字貼りのためのカードを用意する時間が取れなくなってしまった。その事を子供たちに話すと、『どうしても貼りたい。僕たちはいい子になってひとりで勉強しているから、その間に作って下さい。』という意気込みである。それほど好きな勉強ならどんな事をしても間に合わせなければと、夜業で仕上げ、翌朝教室へ持って行くと、四十二名の子供たちが、にこにこ顔を見合わせて、『よー』と歓声を上げたのには、私は驚いてしまった。(中略)

いつもは私と余り口をきかない子供も、漢字貼りの時は、『これ、どこへ貼るんですか。』と聞かに来る。判ると、私の顔を見上げて、にこっとしてステップを踏みながら席について作業をする。一ページ貼ると、『こんだけになった。』と見せに来る子供。『きれいに貼ったね。』と一言言うと、にこにこ顔で帰る。早く終わった子供は、お手伝いがしてやりたくてたまらないらしい。互いに助け合っている。(中略)覚えてくれと口で頼んだ覚えはないが、実によく覚え、よく読んでくれる。明日もまた漢字貼りの日である。『よー』と立ち上って歓声を上げ、手をたたく音が耳もとに聞えるようである。」「

転入生も石井方式にすぐ慣れる

漢字の学年配当表を無視して教えたなら、学校により漢字学習の範囲が違って、転校の場合など困るだろうと心配される方が多いようです。

私は小学校を卒業するまでに、学校が三つ変わりました。この三つの学校が、三つとも

方言を異にしていただけにとっても苦痛でした。話す言葉がお互いに通じない、これはどの苦痛はほかにありますまい。これに比べたら、学習した漢字の違いなど、物の数ではありません。言葉の場合でも、泣くのは一週間です。一週間でとけこんでしまいます。漢字で悩むのは、読めない漢字が出てきた時だけです。学習しない漢字でもかなり文脈から推して読めるのですから、読めないで困るということは、そうそうあるものではありません。それに学校差などというものはめったにあるものではなく、あっても環境に順応しやすい子供はすぐその差を埋めてしまいます。

石井学級の場合は、転入してくる子供は、漢字力に関する限り、全くひどい差があります。学級平均五、六百の漢字力をもっているところへ、わずか数十字の力ではいってくるのです。まさに、外国の学校に入学した子供みたいなものです。それでもその差を埋めるのは驚くほど早いものです。こんな、漢字の心配のために、漢字配当表を作るなどということは、あまりにも視野がせますぎると思います。

ご参考までに、ある母親の手記を掲載しましょう。

世田ヶ谷に住んでいました時に、テレビで東山小学校の石井学級の漢字教育を知り、とても感心しておりましたが、はからずも十二月の初めにこの学校に転校した子供は、石井学級に編入されました。最初の二日間は、家に帰っても泣いておりました。国語はもとより、算数も、文章題は漢字で提出されているので、読めませんから解くことができません。どうなることかと思っていました。三日目から猛然とフライトを燃やして漢字に取り組み始めました。学校から帰ると、「きょうは、こんな字を習ったよ。お母さん、この字知っています。僕知っているよ。教えて上げよう。」と、目を輝やかせて報告するのです。また、うるさいほど、「これ、何という字。」を連発して、三か月余りたった今、どうやらこ

うやらお友達に追い付くことができたようです。(以下略)

かなばかりで書かれていた文章題をやっていたこの子が、石井学級へ転入して、いきなりやらされた問題は、

春男君は、色紙を4枚持っていました。妹に8枚やりました。残りは何枚でしょう。

自動車に男の子が13人、女の子が6人乗っています。皆で何人乗っているのでしょうか。

こんな問題だったのです。これでは、全く取り付く島もなかったと思います。「家に帰っても泣いていました。」とありましたが、学校でも問題が読めなくて泣いていたのです。

教師としても、この時ほどつらい思いをすることはありません。しかし、これほど差のある場合でも、驚くほど早く、いつも追いついているのです。これまでの十余年間、こうい



一年生でも一か月に200~300の漢字を読みこなせる

う転校児を毎年、何人が受け入れてきましたが、このひどい差に長く悩まされたことは一度もありませんでした。こういう特殊の場におかれると、一年生でも、ひと月に二、三百の漢字が読みこなせるだけの能力はもっているように思われます。漢字の学校差など、転校の際、全く問題にはならないことを、私は経験を通して、断言したいと思います。